

このように、学びの主体である子ども達から出された質問を活用して、質問に答える、さらに子どもたちの間でのディスカッションを促して、学習内容のより深い理解へと進めている授業を、現地校の先生は進めようとしているのです。

子ども達自身が疑問を抱き、考え、そして、その可能性のある答えを探し求める学習を、先生が手助けする役で進めるのが、アメリカの学校での授業の理想とされています。

発言は、成績評価の一部

ですから、授業中の子どもの質問、また他の子どもの質問や回答に対する発言（コメント）などを、授業中に積極的に発することが子ども達に求められています。

学習内容の、一人ひとりの子ども自身の理解のためだけではなく、クラス全員で助け合って互いの理解を深めるための質問と発言が高く評価されるのです。

その授業中の発言や質問は、授業態度（citizenship）や授業参加（class participation）の評価項目の一部として、成績・総合評価に反映されます。授業参加の評価を、成績全体の2割程度まで配点する高校の先生も珍しくありません。

その評価が成績の一部として、成績表に記載されることになります。

お子さんへのアドバイス

日本の学校教育を受けてきた子どもの「質問しない」という学習習慣を、現地校に編入して2・3年の海外生にとって、「積極的に質問する」に切り替えることは、英語力のハンデもあって、大変な努力が必要です。しかし、お子さんが現地校での勉強にサバイブするためには「質問上手」になることが必要です。

もし、お子さんが「質問は恥ずかしい」と感じているならば、ここで紹介した日米の学校教育の違いを話してあげて、質問・発言の大切さを、その理由と共に理解させてあげてください。

最初の質問は、「心臓ドキドキ」で大変です。しかし、2・3回の質問を経験すると、緊張も取れ、質問もしやすくなります。授業に積極的に参加できるようになり、クラスメートとして認められ、成績も上がることになるでしょう。

保護者の役割は、この秋の新学期のオープンハウスへの出席です。お子さんのクラスの先生が「授業参加」をどれくらいの割合で成績に加味するか確認してください。そして、「質問をすれば、成績が上がる」とお子さんに教えてあげてください。お子さんの学習態度、学習成績の向上にプラスとなること請け合いです。

もともと、友人の現地校の先生の「授業中の質問と、授業中のおしゃべりを勘違いして、むやみやたらに発言するアメリカの子どもが増えてきた。」との言葉にもあるように、最近のアメリカの子ども達にも変化が出てきているようです。授業中の「無駄話」と勘違いしないように、注意も付け加えておいてください。

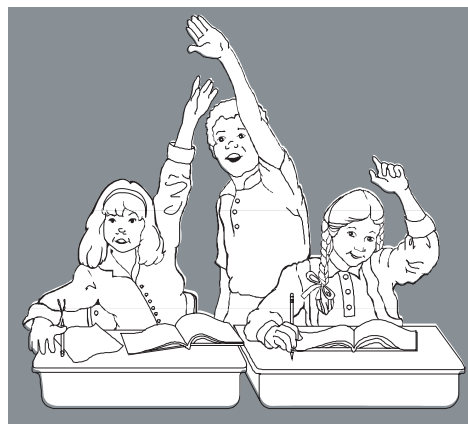
帰国子女の「宝」

日本での帰国子女の研究の多くで、「外国語力」と並んで「積極的な発言力」「的確な質問ができる」が、「帰国生の持つ望ましい特性」のトップに挙げられています。

日本国内の多くの中学・高校・大学が、北米の現地校で学んできた子ども達の「帰国子女」としての入学・編入を強く求めている大きな理由の一つが、この「望ましい特性」なのです。

さらに、帰国子女として成長したかつての教え子たちを見ると、海外で身につけた「質問・発言する力」、それをさらに発展させたプレゼンテーションとコミュニケーションの力が、彼らの大学生・社会人としての成功につながっています。まさに、帰国後の「宝」になっているのです。

お子さんが、現地校での学習を通して、これらの「宝」を身につけるよう、サポートしてあげてください。



☆

「理解する責任が子どもにある日本」と「理解させる責任が先生にあるアメリカ」。この二つの教育の狭間で苦しむ、子ども達のために、「発言・質問することの重要性」を説明してみました。

このコラムが、保護者の皆様の「現地校での教育」の理解と、お子さんの現地校適応・学習のお役にたてれば、幸いです。

今回は、「発表する力」について、お話ししましょう。